

チャボとウサギの事件

## 第一章 事件の日の朝

### 1

その日もぼくは眠かった。

そりゃあ確かに昨日は解きかけの『ファイナル・ファンタジーVII』を終わらせるきつかけをなかなかつかめずに多少は夜更かししたものの、それでも十時半にはベッドに入ったから、少なくとも八時間は寝たはずだった。

それでも、ぼくはベッドから起き出すことができなかった。だってその朝は、なんと言うか、二度寝するにはもってこいの朝だったんだ。

五月半ばの木曜日は天気も快晴で、部屋に漂っている空気の少し冷たさを感じさせるカラッとした肌触りがほっぺたに心地良くて、だからくるまった布団の温もりがまたこのうえなく気持ち良くて、八時間眠ったばかりだけど「もう八時間眠れますか？」と聞かれたら自信を持って「はい眠れます」と答えられそうな、そんな勢いの眠たさだったんだ。まさに《春眠曉を覚えず》というやつだ。

「朝ですよ」というお母さんの声が最初に聞こえたのは、たぶん七時だ。お母さんは仕事に行くから毎朝六時には起きてるけど、化粧や朝ご飯の準備を済ませてからぼくを起こすのは、いつも七時と決まっている。

お母さんの声に気づいたぼくは、口では「ハイ今起きるよ」って返事をしたけど、なかなか起き出すことができなかった。ウーンと寝返りを打ってシーツに額ひたいを、ごりごりと押しつけたら、これがどうしようもなく気持ち良くなって、それで思わず「ああ」と溜息ためいきをもらして枕に顔を深々と埋めたら、いつの間にかうつらうつらとしてきちゃって、気がつくともた、もとの浅い眠りに舞い戻っていたんだ。

二度目に呼ばれたのは七時半だ。お母さんは「リコちゃんが迎えに来てるわよ」と言って、ぼくの部屋の戸をガラリと開けた。ぼくはそれに気づいていたけど眠った振りをしていたら、お母さんは布団をひっぺがすという実力行使に出た。

「リコちゃんが迎えに来てるわよ！」

今度は、さっきと違った少しきつい口調で言った。

——リコ？

そうだ、思い出した。今日ぼくは、リコと一緒に学校に行く約束をしてたんだ。

リコは、ぼくが住んでいるアパートの向かいの部屋に住んでいる同い年の女の子だ。ぼくとリコの馴れ初めは古くて、お互い二歳の時から知ってるから、もう十年のつき合いになる。文字通り「幼馴染み」というやつだ。

ぼくとお母さんは、ぼくが二歳の時にこのアパートに引っ越してきた。その時、向かいの部屋に住んでいたのがリコの一家だ。

お母さんとリコのお母さんは、赤ちゃんを抱える者同士自然と親しくなって、ぼくとリコとのつき合いもそこから始まった。

だからぼくは、物心ついた時にはもうリコが隣にいて、何をするにも一緒だった。一緒に遊んだのはもちろん、幼い頃はよく一緒にお風呂に入った。一緒にも寝た。そんなリコは、ぼくと違って幼馴染みというより兄妹に近い。

リコとの約束を思い出して、ぼくは仕方なく起きあがった。部屋を出ると短い廊下のすぐ向こうがもう玄関なんだけど、リコはそこに突っ立って下をうつむいていた。リコのいつものポーズだ。リコは、いつも下を向くくせがある。

ぼくが部屋から出てくると、リコは顔をあげた。そして左目だけでぼくを見ると、ニッコリ笑って「お早う」と言った。右目は、いつものように右斜め四十五度を向いていた。

リコは片目しかない。正確に言うくと、右目が見えない。

幼い頃（それはぼくと知り合う前らしいんだけど）、リコは、リコのお母さんがちよつと目を離れたすきに公園の植え込みかなんか突っ込んでいって、その時、つつじの枝を右目に刺して

失明しちゃったんだ。だから、右目の瞳は左目と比べると白く濁にごっていて、いつも右斜め四十五度を向いている。

リコの下を向くくせはこの目のせいだ。リコの目は、ちょっと見ただけで変だつて誰でも気づくから、初めて見た人はギョツとした顔をする。リコは、そのギョツとした顔がいやで、だからあんまり人に顔を見せないようにしている。彼女の下を向くくせは、このことからきている。

でもリコは、馴れた人には顔を向けて話す。ちゃんとその人の目を見て話す。むしろ、普通の人よりまじまじと見る。ぼくよりも全然見る。お母さんなんかは、「あなたもリコちゃんのように人の目を見て話さない」と、よく引き合いに出すくらいだ。

人の顔を見る時、リコは左目しか見えないから顔を少しだけ右の方にかしげる。この日もリコは、いつものように顔をちよつと右にかしげ、左目だけでぼくを見ながら「お早う」と言つて、ニコニコと笑つた。

ぼくも「お早う」と返事をしてリコの顔を見た。起き抜けで目の焦点しょうてんがなかなか合わなかつたけど、リコの顔はいつもと同じでもきれいだつた。

「リコちゃんの顔はきれいだね」と最初に言つたのはお父さんだ。でもお父さんが言う前から、ぼくも秘ひそかにそう思つていた。ただ、口に出して言うのは恥はずかしかつたので、言わなかつたけど。内心では、(リコほどきれいな顔立ちの女の子はこの世にいないんじゃないか)とさえ思つていた。

リコは目鼻立ちが整つていて、すごくきれいな顔をしている。それも「かわいい」と「美し

「の」の間くらい、絶妙なバランスの、誰が見てもきれいと言う顔だ。「きれい」という言葉はリコのためにあるんじゃないかと思うくらい、リコの顔はきれいなのだ。

そんなきれいな顔なのに、リコの右目は瞳が白く濁っていて、いつも右斜め四十五度を向いている。でも、そんな変な目もまた、リコにはなぜか似合ってるんだ。

「いっそ、寂然じやくぜんとした美しさを醸かもし出している」と言ったのもお父さんだけど、どういう意味かはよく知らない。けど、リコの顔のきれいさを表すのにはびつたりの言葉に思え、ぼくはこの「寂然」という単語を、リコの顔とセットにして覚えていた。ただ、お父さんからは「リコちゃんには言うなよ」って言われているので、言ったことはないけど。

「じゃあお母さん、仕事に行ってくるからね」と言ってお母さんは、まだ着替えすら済んでないぼくを残して出かけていこうとした。リコが「行ってらっしゃい」と声をかけると、お母さんはニッコリ笑って「行ってきます」と答えた。それから、今度は一転厳しい表情でぼくをにらむと、「リコちゃんを待たせるんじゃないわよ」と低い声音こわねで言い、そそくさと出かけていった。

後にはぼくとリコが残された。ぼくはリコを見た。するとリコも、ニコニコとした笑顔でぼくを見ていた。

リコの笑った顔は、なんだか子犬こいぬっぽい。尻尾しっぽを振ってすり寄ってくる時の子犬の顔だ。とてもかわい。

リコは、ぼくのことを信頼している。信頼しきっている。それは、幼馴染みだからということもあるけど、それだけじゃない理由もある。その理由は……もう少し後で書くことにするけど、

でもとにかくリコは、ぼくを心から信頼しているんだ。

そのことが、最近はいかしくちよつと重荷にもなっている。最近、リコのこの子犬顔がなんだか疎ましい。ぼくは、ぼくを無条件に信用しきっているリコを、どうにも煩わしく感じるようになってる。

——そんなに信用するなよ。

最近、リコにそう言いたくなることもある。

——おれは、そんなに信用される人間じゃないぜ。

実際、何度かそう言ったこともある。

そんな時、リコは一瞬キョトンとした顔をするけれど、すぐにニコニコと笑って首を振る。

「ランくんは、信用される人間だよ」

リコは、胸を張ってそう答える。そう答える時のリコは、いつものおどおどとしたリコらしくなく、自信満々気である。

そう言われると、ぼくとしても何も言えなくなってしまう。リコは、とにかくぼくのことを頭から信じ込んでいるのだ。

だからぼくは、最近少しリコと距離を置こうとしている。話しかけられても素っ気ない態度を取ったり、小さな約束を破ったり。そうやって、リコの信頼をちよつとずつ打ち砕こうとしている。

(ぼくのことを無条件に信用するのをやめてもらいたい。リコの重たさを、なんとか軽くした

5)

そんな思いから、ぼくは最近リコに（少しだけだけど）意地悪をするようになっていたんだ。この日も、そんな意地悪心がむくむくと湧きあがってきた。リコの子犬のような顔を見ていると、その期待を裏切ってやりたいという乱暴な思いに駆られる。そういう悪魔な心が、ぼくの中にはある。

だからぼくは、その朝、リコに向かってこう言った。

「ごめんリコ、先に行っててくれる？」

3

一緒に学校へ行く約束をしたのは、昨日だった。今日、ぼくはたまたまりコと一緒に日直をやることになっていた。

ぼくとリコは、今年からまた同じクラス（六年間で通算三回目）になっているけど、日直を一緒にやるのはこの日が初めてだった。

「じゃあ明日、一緒に学校行こうぜ」

そう言うのと、リコは嬉しそうにニコニコと笑って「うん」とうなずいた。

リコとは、昔は毎日一緒に登校していた。確か四年生の春まではそうしていた。でもその頃から、段々と別々に登校するようになっていった。

別々に登校するようになった理由はいろいろあって、一つには、女子と一緒に歩くのが恥ずかしくなったということもあるけど、一番大きいのは、ぼくが朝寝坊になったことだ。

ぼくは三年生の頃から段々と朝寝坊になって、決まった時間に起きられなくなった。学校へは、それまでは余裕を持って始業の二十分前に着いていたのが、やがて十分前になり五分前になり、とうとうギリギリに着くようになった。

そうなると、勤勉で実直なリコとは時間が合わなくなった。リコは今でも一年生の子がそうするように、三十分前には必ず学校に着くようにしている。

リコは最初、別々に登校することを寂しく思っ、ぼくの時間に合わせようとしたことがあった。ぼくらのアパートから学校までは歩いて十分くらいなんだけど、ぼくに合わせて始業の十分前に一緒にアパートを出たことが一度だけあった。でもその時は、二人とも遅刻してしまった。理由は、リコの歩くスピードが遅かったことだ。

ギリギリに家を出るぼくは、歩くのはいつも早歩きだ。時にはちよつと走ったり、信号の手前ではダッシュしたりもする。

でもリコは、ぼくのように走ったりダッシュしたりすることができない。片目が見えないこともあるんだけど、運動神経もともと良くない。だから、早く歩いたり走ったりすることが苦手なんだ。

その朝、試しにぼくと一緒に登校してみたリコは、下り坂で加速したり、信号の手前でダッシュしたりできなかつた。それでも頑張つてなんとかついてこようとしたんだけど、校門手前の最

後の登り坂で息を切らして、階段を二段跳ばしで駆けあがるぼくについてくることができずに、大きく後れを取った。

それでぼくも、さすがに置いてけぼりにするわけにもいかなないので階段の上のところで待っていたのだけど、おかげでその日は二人とも遅刻してしまった。

そのことがあって以来、リコもぼくと一緒に登校するのを諦めて、一人で登校するようになった。ぼくは遅刻の常習犯だけど、リコが学校に遅刻したのは六年生になる今日までこの時一度きりだから、その件では少し悪いことをしたと思っている。

この日は、だから久しぶりの一緒に登校になるはずだった。

うちのクラスの日直には、毎朝学校で飼育しているチャボやウサギの世話をするという仕事で課せられていた。これは、担任の日高先生が飼育担当教諭だったことからそうなっていたんだけど、この世話というやつがけっこう面倒くさかった。

エサをやるだけなら簡単なんだけど、それと一緒に小屋を掃除しなければならぬのがやっかいなんだ。チャボもウサギも、小屋中とところかまわずフンをまき散らすから、きれいに片づけるのには骨が折れる。

しかも、飼育小屋にはまた別の動物もいて（この動物については後で詳しく紹介する）、その世話もしなければならなかった。だから、たつぷり三十分はかかってしまうのだけれど、おかげで日直になると、その日の朝は少なくとも始業時間の四十五分前には登校する必要があったのだ。日直になるのは今年二回目だったけど、ぼくはこの日直が苦手だった。チャボやウサギの世

話をするのも面倒なんだけど、早く起きなきゃならないのがつらかった。特に、《春眠曉を覚えず》なこんな朝は、それはもはや拷問ごうもんに近かった。

それでもぼくは、リコと約束したんだ。「一緒に学校へ行こう」って。だって、そうすれば早起しなくちゃならないでしょ？ そうやって、早起きすることの氣力を自らに奮い立たせようとしてたんだ。

4

だけど結局、いざその朝になってみると、そんな氣力はへなへなと萎しぼんでしまった。早起きして学校へ行くのがどうにも面倒くさくなった。

この時、時計の針はもう七時四十分を指していて、本当は家を出なければならぬ時刻だった。でもぼくは、起きたばかりのパジャマ姿で、このまま速攻で着替えれば出られないこともなかったんだけど、それじゃ顔も洗えないし、ご飯も食べられない。

そこで束の間つか、考えたんだ。動物の世話を取るか、朝ご飯を取るか。そうして結局、朝ご飯を取ることに決めちゃった。

リコと一緒に日直をやることになった時、こうなる予感は何となくあった。リコに甘えちゃって、仕事を押しつけてしまう予感。

リコはきつと、ニコニコと笑っていやとは言えないだろう。

他の女子だったら、こうはいかない。その場合はほくも諦めて、頑張つて四十五分前に学校へ行つてたと思う。

でもリコは、「ごめん、小屋の掃除やつといってくれる？」と頼めば、きつと文句も言わずに「うん」とうなずくだろう。

ぼくにはそれが分かっていた。でも、だからこそ、それに甘えたくなかった。

お母さんにも（そしてお父さんにも）、「リコちゃんに甘えてはいけませんよ」って普段から言われている。リコはやさしい。ぼくが頼めばなんでも引き受けてくれる。そしてだからこそ、それに甘えちゃいけないことは、ぼくにも分かっていたんだ。

でも、やっぱり、どうしても、ああ、この日の朝も、ぼくはまた、リコに甘えてしまったんだ。「ごめんリコ、おれ、今起きたばっかりなんだ。まだご飯も食ってないし。だからさ、悪いけど先行つてくれる？　それで、小屋の掃除、始めといて。おれも、後から急いで行くから。うん、飯食つたら速攻で駆けつける」

それを聞くと、リコは瞬間的に表情を曇らせた。それは、ぼくを非難するような曇らせ方ではなく、とてもがっかりしたような曇らせ方だった。リコは、ぼくと一緒に登校することをとても楽しみにしていたんだ。

ぼくにはそれが分かっていた。それが分かかって、あえて意地悪をした部分もあった。リコの信頼を、もう少し軽くしようとするためだ。

案の定、リコはとても悲しげな顔をした。子犬が母犬のおっぱいをもらえなかった時の顔だ。

その顔を見て、ぼくは少し意地悪な快感を覚えた。

——分かったら？ リコ、おれはだらしのない人間なんだよ。

その一方で、少しだけ後悔もしていた。

——やっぱ、リコにはやさしくしてあげなきゃいけなかったかな……

でも、もう遅かった。もう後には引けなかった。

リコは、「分かった、早く来てね」って言い残すと、顔を伏せて玄関から出ていった。その寂しそうな背中を見ると、ぼくはますます後悔した。

——ああ、おれはなんてひどい人間なんだ！ リコのやさしさに甘えたり、リコの気持ちを踏みにじったりして。

でも、すぐに（しょうがないかな）って思い直した。だって、食堂に入るとテーブルの上にはイチゴジャムをつける予定のトーストと、ケチャップのかかったプレーンオムレツが待っていたからだ。それを見ると、（これをゆっくり味わわない手はないな）って思えてきた。

そうしてご飯を食べ始めると、罪悪感も徐々に薄らいでいった。ほんと、ぼくはなんてだらしのないやつなんだろう。

でも、この時はまだ知らなかったんだ。この後、ぼくはもつともつと後悔させられることになるというのを！

## 著者プロフィール

本名同じ。1968年7月生まれ。東京都日野市出身。東京藝術大学美術学部建築科卒。大学卒業後、作詞家の秋元康氏に師事。放送作家として「とんねるずのみなさんのおかげです」「ダウントOWNのごっつええ感じ」等のテレビ番組の制作に参加。アイドルグループ「AKB48」のプロデュースにも携わる。その後、ゲームやウェブコンテンツの開発会社を経て、現在は株式会社吉田正樹事務所に作家として所属。

2009年『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』で作家デビュー。270万部を超えるベストセラーとなる。

著書に『甲子園だけが高校野球ではない』（監修）、『エースの系譜』『小説の読み方の教科書』『鮭はここまで約束守ってんのに』（共著）などがある。

# チャボとウサギの事件<sup>じ けん</sup>

2012年6月15日 第1刷

著者 <sup>いわ きき なつ み</sup> 岩崎夏海

発行者 村上和宏

発行所 株式会社文藝春秋



〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23  
電話 03-3265-1211

印刷所 精興社

製本所 加藤製本

◎定価はカバーに表示してあります。

万一、落丁・乱丁の場合は送料当方負担でお取り替えいたします。  
小社製作部宛お送り下さい。

◎本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、私的使用以外のいかなる電子的複製行為も一切認められておりません。

©Natsumi Iwasaki 2012

ISBN 978-4-16-381410-0 Printed in Japan